

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五十五点)

五歳のときに両親を亡くし身寄りのなかった「わたし」(百音)は、母親の前夫である統理に引き取られ、現在十歳(小学五年生)になっている。統理は、屋上神社と庭のあるマンションを親から譲り受け、官司の資格を得て管理している。路有は、そのマンションに住む統理の友人である。本文は、下校時のおしやべりの中でそれぞれの親の話をしていたクラスメイトたちが、「わたし」の家庭の事情に気づいて口々に謝ってきた場面に続く部分である。

屋上神社でおやつを食べていると、水遣りを終えた統理と路有が戻ってきて、I 腰を下ろした。今年はずい暑さで、屋上にはまだサルビアや百日草が咲いている。

「もう九月だつてのにいつまで暑いんだ」

「オーストラリアで道路が溶けたらしい」

「ここが溶けないことが不思議だな」

ふたりは水を張ったバケツの中から蜜柑ゼリーを取り出した。わたしはお先に白桃のゼリーを食べている。① つつき回すばかりで、やわらかいゼリーはどろどろになっている。

憂鬱なわたしの目の前を、ユヅルくんが通りすぎていく。一日一度は必ずお参りにくる*氏子のお婆ちゃんの手をつないでいる。ユヅルくんは幼稚園の年長さんで、大人になったらわたしをお嫁さんにもraitたいと言う。わたしはもらってこれなくていいと答える。誰のお嫁さんになるうと、わたしはわたしのものだ。誰にもあげたくない。百音ちゃんもユヅルくんが手を振ってくる。わたしは頬杖をついたまま、適当に手をII 振り返した。

「どうした。なんか機嫌悪いな」

路有がわたしのほっぺたをつついてくる。

「思いやりってなんなのか、ずっと考えてるの」

「なにかあったのか？」

統理が蜜柑ゼリーのシール蓋を剥がしながら訊いてくる。

「道徳の授業のテーマだったの。感想文の宿題も出た」

「難しいテーマだ。それで悩んでるのか」

「悩んでるっていうか」

わたしは今の気持ちのようにぐちゃぐちゃにゆるんだゼリーを見つめた。

「なんかよくわかんない。ちよつと嫌な気持ちなの」

「嫌な気持ち？」

どう説明すればいいのか、考えながら話してみた。わたしの本当のお父さんとお母さんは死んでしまった。それは悲しいことだけど、代わりに統理と路有がいる。けれど本当のお父さんとお母さんがいるみんなにとつて、親が死んじゃって赤の他人のおじさんと暮らしているということはあきらかな不幸であり、だからわたしの前で親の話をしたことを謝った。自分がされて嫌なことを人にもしないという思いやりのルールに則って、みんなわたしを思いやってくれたのだ。みんな優しい。わたしはみんなが好き。それは間違いない。

「なのに、なんでわたしは嫌な気持ちになってるのかな」

「本当にわからないのか？」

わたしはゼリーを見つめ、静かに首を横に振った。

わかっている。でもわかりたくない。わたしはみんなの話を普通に聞いていたのに、勝手に思いやられて、かわいいそうな子扱いをされたことにむっとしてる。でもそう言えなかった。わたしはかわいそうじゃないなんて、言えは言うほどかわいそうな子になっていくようで。

「わたし、優しくしてくれてありがとうねって思えばいいのかな」

「そんなことを思う必要はない」

「でも②優しくされたのに嫌な気持ちになるなんて、間違ってるんだよね？」

「間違っていない。百音の感情は百音だけのものだ。誰かにこう思いなさいと言われたら、まずはその人を疑ったほうがいい。どんなに素晴らしき主義主張も人の心を縛る権利はない」

統理は静かに、けれど

III

言い切った。

「じゃあ先生が間違ってるの？」

「間違っていない。ただ、段階を踏むことが大事なんだと思う。算数だって最初からかけ算なんてできないだろう。足し算引き算と順番に教えて

もろう。今は足し算の段階なんだ」

「誰も間違っていないのに、わたしだけ嫌な気持ちになるの？」

「そんな不公平だと唇を尖らせると、統理はもつともだとうなずいた。

「本当に不公平だ。でも百音は人よりたくさんものを持つてる。その分、考えることも増える。考えることは百音の頭や心を強く賢くしてくれる。それはいいことだよ」

「たくさんもの？」

わたしは首をかしげた。

「わたしはお父さんもお母さんもないし、それってわたしは人より持つてないってことなんじゃないの？ だからみんなわたしをかわいそうって思うんでしょう？」

「失うことや持つてないことで得られるものもあるんだ」

ますます意味がわからなくなった。

「そうそう、俺も一時はスッカラカンになったけど、今はたくさん得てるぞ」

路有はゼリーを食べながらのんびりと空を見上げる。

「路有がスッカラカンだったときのこと覚えてる」

彼氏に振られて、うちのリビングでダンゴ虫のように毛布にくるまっていた。

「あのときは百音にも世話になった。ありがとうな。でもそれよりもっと前から俺はいろいろ失くしてきたし、でも失くしっぱなしじゃなくて、たくさん得てきたんだ」

「路有はなにを得たの？」

「友達、今の屋台バーの仕事、新しい彼氏、統理や百音のお隣さん生活も楽しいし、昔とちがって、自分に嘘をつかずに生きていけることも健康的でいい」

IV

路有は笑う。確かに路有は毎日楽しそうで、そこは疑う余地がない。失うことで逆に得られるものがある、というのはやっぱりちよつとまだ不公平な気もするけれど、わたしはほんの少し気持ちが晴れた。嫌な思いをすることも、まるつきり無駄ではないということだ。

「③ けど『俺が嫌なことはみんなも嫌』は、最初の考え方としてどうなんだろう。『俺が嫌なのに、なんでおまえは好きなんだ』って疑問が湧くんじゃないかな。そこで話し合えればいいけど、短気なやつだと『俺が正しい。おまえは間違ってる』って喧嘩になりそうだし」
路有が言い、統理もうなずいた。

「できれば『ぼくたちは同じだから仲良くしよう』より、『ぼくたちは違うけど認め合おう』のほうを勧めたい。次の授業では、ぜひそこまで進めるよう先生にがんばってもらいたい」

「次の次では、『それでも認められないときは黙って通りすぎよう』だな。『無駄に殴り合って傷つけ合うよりは、他人同士でいたほうがまだ平和』ってあたりまで」

「結果として、世界は穏やかに分断されていく」

「うーん、終わりの正解もない話だな」

「小学生相手にこんな難しいテーマに取り組まなきゃいけないなんて教師は大変な仕事だ」

ふたりはゼリーを食べながらおしゃべりをしている。よくわからないところも多いけど、ふたりの話を聞いていると、散らかっていた心が少しずつ整頓されていくように感じる。

「百音はどう思う？」

そしてわたしにも意見を訊いてくれるので、置いてきぼりにされた気がしない。

「認め合うのが大事だっていうのはわかった」

「それはよかった」

ふたりが微笑んでうなづく。

「わたしと統理って、普通なら認め合ったり仲良くできない関係なんでしょ？」

「うん？」

「前に近所のおばさんたちが言っていた『*なさぬ仲』ってそういうことなんだよね。わたしもあのころより賢くなったから、いろいろわかるようになった。わたしは本当なら引き取りたくない子供だったってことも」

「百音、それは違う」

統理が i 顔色を変えたので、大丈夫、とわたしは急いで続けた。

「なんで統理がわたしを引き取ってくれたかはわからないけど、誰と誰が手を取り合ってもいいんだって、それが世界を救うんだってこともわかったもん」

「え？」

「認め合うって、そういうことなんでしょう？」

統理は ii 目を白黒させた。

④ どうやら統理は自分が言ったことを忘れてるらしい。

あれはお父さんとお母さんのお葬式そうしきのあと、初めて統理に会った日のことだった。

——はじめまして。これから百音ちゃんのお父さんになる国見統理くにみとうりです。

自己紹介じこしょうかいをしたあと、少し考えるような顔をして統理は続けた。

——お父さんと思えなかったら、無理に思わなくてもいいんだ。でもこれからひとつ屋根の下で暮らすことになるから、できるだけ協力し合っ
って気持ちよく暮らしていきたいと思ってるよ。

ヒトツヤネノシタってなんだろう。わたしは首をかしげた。

——おじさん、だれ？ お父さんとお母さんのお友達？

——友達ではない、かな。

——じゃあお兄ちゃん？ 弟？

——お兄ちゃんじゃないし、弟でもない。

——じゃあ、おじさんは百音のなに？

統理の横にいる児童相談所の職員さんは困った顔をした。しばらく黙ってわたしと見つめ合ったあと、統理は意を決したように姿勢を正した。

——百音ちゃん、事実というものは存在しません。存在するのは解釈かいしゃくだけです。

——かいしゃく？

——そう、これはニーチェという人の言葉です。

——にいちえ？

——ぼくと百音ちゃんは血がながっていない。他にもたくさん事情があつて、これからぼくたちのことをいろいろ言う人がいるかもしれない。でもそれはその人たちの解釈であり、ぼくと百音ちゃんがあるかは、ぼくと百音ちゃんが決めればいい。

わたしは外国の絵本を見るように統理を見つめた。

ぼかんとしているわたしに、統理はさらに続けた。

——手を取り合つてはいけない人なんていないし、誰とでも助け合えばいい。それは世界を豊かにするひとつの手段だと、少なくともぼくは思っています。

さっぱりわからないまま統理の話は終わり、わたしは小さく口を開け続けた。

——あの、国見さん、百音ちゃんはまだ五歳さいですから。

児童相談所の職員さんが遠慮えんりよがちに統理とんりに囁ささやいた。

——そうですよね。

統理はうなずいたものの、それ以上どう説明していいのかわからないようだった。大ピンチな表情がかわいそうで、わたしはおそろおそろ手を差し出した。

——わかった。じゃあ、これから仲良くしてね。

——ああ、よろしく、百音ちゃん。

統理は安心した笑顔でわたしの手を取った。⑤こつこつしていたお父さんの手とは違う、すんなりと薄うすくて、けれど大きな温ぬかい手だった。

——よろしくね、とーり。

そう呼ぶと、職員さんが「百音ちゃん、お父さんよ」と小声で言った。

今度はわたしが困った。わたしにとってお父さんは死んだお父さんだけなので、初めて会った人をお父さんとは呼べない。いいんだよ、と統理がつかない手に力を込めた。

——呼び方も暮らし方も、これからふたりでひとつずつ作っていこう。

あの日から、わたしと統理の手はずつとつながれている。

(凧良ゆう『わたしの美しい庭』より)

*注 氏子うじこ 氏神うじがみ 氏神をおまつりする人たち。

なきぬ仲なきぬ 血のつながっていない親子関係。

問一 I IV に入る適切な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使ってははいけません。

ア きつぱりと イ ひらひらと ウ にこりと エ やれやれと オ しみじみと

問二 —— 線部 i・ii の語句の本文における意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

i 「顔色を変えた」

ア 体調が悪くなった イ いらだった ウ 青ざめた エ 赤面した オ 真剣しんけんになった

ii 「目を白黒させた」

ア 目を大きく見開き、感心している イ あれこれと考えをめぐらせている ウ 想定外のことには驚いている
エ あまりの眠気ねむけに目をしよぼしよぼさせている オ どうしてよいかわからず困っている

問三 ——線部①とありますが、なぜ「わたし」は「つつき回すばかり」なのですか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 考え事をしながら適当に選んだが、ゼリーを食べている場合ではないと思いついたから。

イ 好きでもないユヅルくんに好意を寄せられ、将来を勝手に決められ腹立たしく思っているから。

ウ 何も考えずに手を伸ばして取ったが、実際はたいしてお腹がすいていなくて困っているから。

エ 答えの出ない問いに気を取られ、気持ちの整理がつかないまま思いを持って余しているから。

オ ちよつと嫌な気持ちとどう向き合えばよいのかわからず、ゼリーにやつあたりしているから。

問四 ——線部②とありますが、このときの「わたし」の心情を説明しなさい。

問五 ——線部③から始まる二人の会話から読み取れる考えとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じ考え方ができることを基準にして物事を判断してしまうと、結果として異なるものは排除すべきだという思考につながってしまうという事。

イ 自分が嫌だと思ふことは他の人にとつても嫌なことに違ひないので、他の人にしてはいけないという思いやりを持って生きていくべきだということ。

ウ 人と人が何らかの関わりを持てば傷つけ合うことになつてしまうので、お互いに距離を取り、交わらないようにすることが最善の方法だということ。

エ 人と人との関係のあり方に正解はないので、自分が嫌だと思ふことは他の人も嫌がることだからしないという考え方に説得力はないということ。

オ 人との関わり方を好き嫌いだけで判断して決めつけてしまうと、お互いを認め合い尊重し合う良好な人間関係など築けるはずがないということ。

問六 ——線部④とありますが、統理はどのようなことを言いましたか。四十字以内で説明しなさい。

問七 ——線部⑤とありますが、ここでの「わたし」の心情の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父親のような力強い手ではないことにとまどいつつ不安を覚えているが、今はこの人に頼るしかないとするような気持ちになっている。
- イ 急にわたしと暮らすことになった統理が頼りなくかわいそうに思えて、わたしが助けていかなければならないと気持ちを新たにしている。
- ウ 統理の手の温かさにくらか安心感を覚えはするが、父親とは違う薄い手にどうしてもお父さんと呼べないと心を閉ざしてしまっている。
- エ はつきりとした説明もなく一緒に暮らそうと言う言葉にとまどい、どんなに優しくされても、どうしたらよいかわからないでいる。
- オ 統理とは出会ったばかりでよくわからず、父親のような力強さも感じられないが、どことなく助け合っていけそうな安心感を覚えている。

問八 次の文章は本文の続きを生徒たちがまとめたものです。生徒たちは本文と続きのまとめを読んで話し合っています。以下のまとめと本文をふまえて、会話文の(1) (3)に当てはまる最も適切なものを、それぞれア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

《まとめ》

五年がたち、百音は統理がどうして自分を引き取ってくれたのかわからず、その理由をたずねます。しかし統理は百音の気持ちと話す時期を尊重し「大切なことだから、百音に伝えるために準備する時間がほしい」と答えを急ぎません。場面は屋上の神社と庭へ移ります。路有の知り合いの桃子さんと基くんがお祓いのためにやって来ます。二人はそれぞれ形代（お祓いなどに用いる紙の人形のこと）に「お見合いの幹旋（間に立って世話をすること）」再就職の幹旋を切ると書き、百音も「へんな思いやり」を切ると書きます。人々は統理と百音の関係を「親子みたい」「おかしい」などいろいろ言いますが、それはそれぞれの見方にすぎません。百音は、世間でいう普通とは違う関係でも安心して暮らせるこの場所を「とても好き」と感じます。

会話文 1

A 人にはそれぞれ「かいしゃく解釈」があるって本文にあったよね。

B うん。「親子みたい」って言う人も「おかしい」って言う人もいた。

C そんな意見が出たとき、本文を参考にすると、どう受けとめればいい？

D (1)

ア 人によって考え方がちが違うから、多数決でどっちが正しいか決めよう。

イ どちらもその人のとらえ方だから、事実のように固定しないで聞こう。

ウ 私たちだけでは判断が難しいから、先生が支持した方を正解にしよう。

エ 相手が不愉快ふゆかいになるような、からかいっぽい意見は全部禁止にしよう。

オ 自分の考えと近い、ふだん仲の良い友だちの意見だけを採用しよう。

会話文 2

A 百音は統理を「お父さん」じゃなくて「とーり」と呼んだよね。

B その場で「お父さんと呼びなさい」って強制しなかったのも印象的。

C この呼び方の選び方って、どんな考え方とつながるのかな？

D (2) じゃないかな。

ア 世間の常識や価値観にあえて逆らうという姿勢

イ 呼び方は常に家族会議で多数決をとるという規則

ウ 関係も呼び方も、二人で決めていくという合意

エ 子どもは周りの考えに合わせるべきという常識

オ あいまいに呼んでおけば問題にならないという工夫

- A 私たちのクラスで「思いやりのルール」を一言で決めるなら？
- B 実際に行動に移せる言い方がいいよね。
- C じゃあ、候補^{こうほ}を出して選ぼう。

〈候補〉

- ア 本人の考えを確認してから手を貸す。
- イ 先生に言われたことを守って行動する。
- ウ 自分がされて嫌^{いや}なことは相手にもしない。
- エ 困っている人がいたら迷わず助ける。
- オ 自分の思いよりみんなの意見を尊重する。
- D 本文の主題にも合うものにしようよ。
- A だったら、「(3)」がいいね。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文の表記を一部変えています。)(四十五点)

夏目さんは他にも、*塾の数年前から近所で昆虫を捕まえて食べてみる「とって食べる」というイベントや、地域の**ミズベ**でのアカミミガメの駆除活動などを行ってきました。アカミミガメも駆除した後はカレーにして食べることもありました。

アカミミガメはもともとアメリカにいた生きものですが、今では北海道から沖縄県まで、全ての都道府県で確認されています。日本では、晴れた日にひなたぼっこをしているカメを見かけたらアカミミガメということが一番多いほどに増えていて、環境省の2019年の**スイケイ**では野外に約930万匹がすんでいるとされています。

もとは縁日などで「ミドリガメ」として子ガメが売られており、帰った人が飼いきれずに近くの川や池に放してしまったものが、今度は野外で広がってしまったと考えられています。その地域に人がよそから持ち込んだ生きものを指す「外来種」という言葉を知っている人にとっては、アカミミガメは外来種の中でも有名な生きものの1つかもありません。あごが丈夫で、固いものでもがしがしとよく食べます。ひなたぼっこの場所やエサをめぐることももとも日本にいたカメの邪魔をしたり、数が少なくなっている在来の水草や、農産物のレンコンを食い荒らしてしまったりといった被害が問題になっています。

さて、そんなアカミミガメの駆除でも夏目さんは、「生物多様性塾」と同じようなことを大事にしています。感じたことを言葉にすること、それを人と話し合って、いろんな意見があると知ること、その中で何をやっていくのかみんなで考えたり、協力しながら活動したりしていくことです。ある結論を示すよりも、そこに**イタ**るまでの「対話」の大切さを学んでもらうことを大事にしているといってもいいかもしれません。たとえば、アカミミガメの駆除作業だったら、捕まえたカメを前に子どもたちは悩みます。「飼育施設を作ったところで飼ってあげられないだろうか」。でも、何十年も生きるカメをたくさん飼っておく施設をいっただうやって作ったらいんだろう? そもそも誰が飼い続けるべきなんだろう? 飼育施設が難しそうなら、「どうしても駆除しなければならぬなら、食べてみよう」。そんな具合です。でも、アカミミガメが食べきれないくらいたっぷり捕れたら? カメは食べられるけど食べられない生きものは駆除した後どうしたらいいんだろう? 疑問は次々わいてきます。

それに、実際に保護活動や駆除活動をやってみると「生きものを守る活動は大事だと聞いたけど、体力的にしんどくて自分には無理だ」などと思うかもしれません。あるいはそれによって、「いやだなあ」だけではなく、「実際に活動をしている人はすごいなあ」と思えるようになるか

もしれません。また、対話を通じて「自分は生きものを守りたいけど、今のままでは誰も手伝ってくれそうにない」と思ったら、どうやったらみんなに参加してもらえるのか、必死で考えるでしょう。

まずは自分が感じたことを誰かと話し合ってみること、言い負かそうとするのではなく、相手の言っていることをよく聞くこと、その中でできることややるべきことを考える。夏目さんが大切にしているのは、そんな風に、みんなが一緒に悩みながら考えて解決策を探っていく^dカテイなのです。

一方で、活動を続ける中で、違和感を覚えることも時々あると言います。イベントには新聞社やテレビ局がやってきて、ニュースにすることがあります。最初のうちは夏目さんも、注目してもらえたいと思って、^eセツキョク的に取材を受けてきました。

ただ、昆虫を捕まえて食べると、「命の大切さを伝えるイベント」と報じられ、アカミミガメをカレーにすると「命を無駄にしないため」と書かれることが少なくなかったそうです。そうした報道に触れた知り合いから「いい活動ですね」と言われることもあるそうです。夏目さんはそんな風に報じられたり、声をかけられたりするたびに、言いようのない居心地の悪さも感じてきたそうです。

夏目さん自身は、最初に昆虫やカメを食べた時に「おいしい！」とか「もっと食べたい！」とか、そういう感想を持ったとしても、それはそれで尊重されるべきだと考えています。「食べてみて「命の大切さ」を感じる子がいてもそれは自由だけれども、それは僕が伝えたり押しつけたりするものではない」と言います。人は同じことを体験しても、感じることは様々です。その人の性格、それまでに経験したことや勉強してきたこと……。人の数だけ第一印象があります。「まずは感じたことを大切にしたいです」

もちろん、「命は大切じゃないんですか？」とか「命を無駄にしないのはいいことですよ？」と聞かれたら、それも否定はしません。でも、イベントにおいて本当に一番大事にしたいものとはちよつとずれています。だから、夏目さんは「間違っているとまでは言いませんし、恨むつもりもないのですが、何となく一面だけを報じられているように思うのです」と言います。

とはいえ、夏目さん自身も、「最初は自分も深く考えていなかった」と言います。はじめのうちは、アカミミガメを捕獲した^{ほかく}後には、「食べて供養してあげよう」と思っていたそうです。「命を大切に」とか「無駄にしない」という考えに近いですね。だから、新聞などがそう報じること、モヤモヤした感じは受けつつも、わざわざ反論することはしません。

昆虫を食べるイベントを始めたきっかけも、とある本を読んで、昆虫は国内外の様々な地域で昔から食べられていることや、なかにはとてもおいしい虫がいるらしいことなどを知って、「そんなに豊かな文化があるなら、自分も体験してみたい」と思ったことだったそうです。それまで

は生きものに対して、それほど興味があつたわけではなかったそうです。

でも活動を続けていく中で、徐々に考えが広がっていったのだそうです。昆虫を食べていくことから少しずつ生きものや自然への関心が深まっていきました。また、アカミミガメを駆除することは一見命を奪うように見えても、アカミミガメによって奪われている生きものたちの命を救ったり、アカミミガメの被害に困っている人を助けたりするという面があることも分かってきました。一方で昆虫を食べたり、カメを駆除したりすることは、命をもらったり奪ったりすることだという思いも消えるわけではありません。

でも、そういうことはたくさんあります。それこそ、活動をし、対話をしていく中では、どちらかの意見だけが正しくて、どちらかは完全に間違っているということの方が珍しいのです。あるいはどっちの言い分にも説得力があるけど、同時に両方ともは成り立たないことだって少なくありません。

夏目さんは、「先に矛盾のないことや分かりやすいこと、たとえば「命は大切」ということだけを大人がすり込んでしまうのは、むしろ考えるのを止めてしまうことにつながりかねないと思います」。そんな風に心配しています。

今、強く感じているのは、「白黒つけられないこと、矛盾の中にこそ大事なものがある」ということ。この言葉はとても印象に残りました。夏目さんの塾に初めて来た子どもたちはこれから先もきつと、まずは好きに意見を出し合いながら、考えを広げたり、深めたりしていくのだろうと思います。

(朝日新聞取材チーム『野生生物は「やさしさ」だけで守れるか?—命と向きあう現場から』より)

*注 塾 II 「生物多様性塾」という、地域の人々が参加し、専門家と一緒に生き物の観察や議論をして、最後に感じたこと、考えたことを発表するイベント。

問一 のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ———線部にある「ちよつと」の「ずれ」を説明しなさい。

問三 「白黒つけられないこと、矛盾の中にこそ大事なものがある」という筆者の考え方に対して、あなたはどうか考えますか。例を挙げながら三〇〇字以内で述べなさい。

(このページで、問題は終わりです。)